

コンパス薬局横浜西 スキルアップ勉強会

2017. 7. 6 高柳

第 118 回 『ハンプ』

第一三共株式会社 石川 正人様

参加者：小西、佐藤、山城、渡辺、小平、高柳

【効能・効果】

急性心不全（慢性心不全の急性増悪期を含む）

【用法用量】

本剤は日本薬局方注射用水 5mL に溶解し、必要に応じて日本薬局方生理食塩液又は 5%ブドウ糖注射液で希釈し、カルペリチドとして 1 分間あたり $0.1 \mu\text{g}/\text{kg}$ を持続静脈内投与する。なお、投与量は血行動態をモニターしながら適宜調節するが、患者の病態に応じて 1 分間あたり $0.2 \mu\text{g}/\text{kg}$ まで増量できる。

【特徴】

ヒト心房性Na利尿ペプチドの注射用製剤。血管拡張作用、利尿作用、心筋保護作用などを併せ持ち、心不全の急性増悪期にも用いることができる。血管拡張作用は濃度依存的に作用が増強し、肺動脈、肺静脈には作用が出やすい傾向がある。利尿作用はフロセミドなど他の薬剤と違い、体重に依存して作用が増強する特徴がある。使用によって、コントロール群に比べ優位に心血管イベントが減少し、再入院率も減ったとのデータがある。低血圧、脱水症状、右室梗塞の患者には禁忌。

【副作用】

承認時までの調査で総症例 396 例中、副作用が報告されたのは 20 例 (5.1%) 32 件で、血圧低下 2.3% (9/396)、低血圧性ショック 1.0% (4/396)、徐脈 1.0% (4/396) 等であった。また、臨床検査値の異常変動はLDH 上昇 2.2% (7/319)、尿蛋白増加 2.1% (4/188)、血清K値の変動 1.8% (6/332)、総ビリルビン上昇 1.5% (4/270)、血小板減少 1.3% (4/307) 等であった。

承認後の使用成績調査で総症例 4,105 例中報告された副作用は 673 例 (16.4%) で、血圧低下 9.2% (377 件)、BUN 上昇 1.9% (78 件)、クレアチニン上昇 1.7% (68 件)、血小板減少 1.4% (59 件)、ALT (GPT) 上昇 1.0% (43 件)、AST (GOT) 上昇 1.0% (41 件) 等であった。

【考察】

点滴静注用の製剤であり、元来、調剤薬局とはあまり接点の見られない薬である。しかしながら、近年実験的に1週間に1回の点滴といった手法で使用するにより心血管イベントが減ったなどとするデータもあり、将来的に在宅医療や外来治療の一部に取り入れられる可能性も示唆されている。薬局にもハンブによる治療を受けた患者が来局する可能性があるため、普段調剤でかかわることのない薬であっても理解は深めておく必要がある。

【質問事項】

Q 1. 現状で医療機関の外来での使用はあるのか？

A 1. 保険適応がまだ見られないので現時点では難しいが、実験的なデータは示されてきている

Q 2. ハンプの代わりになるほかの薬剤はないのか？

A 2. 現在同様の効果のある薬剤は確認できていない。

以上